

草の名

金子みすゞ

人の知ってる草の名は
私はちっとも知らないの。

人の知らない草の名を
私はいくつも知ってるの。

それは私がつけたのよ。
好きな草には好きな名を。

人の知ってる草の名も、
どうせ誰かがつけたのよ。

ほんとの名前を知ってるは、
空のお日さまばかりなの。

だから私はよんでるの。
私ばかりでよんでるの。

一年ほど前のこと、年中組男の子が電線の上にとまっていたトンボを発見。

「赤とんぼかなー？」 「赤くないから違うよ」

「しおからとんぼ？」 「こんな色じゃなかったよ」

「オニヤンマ？」 「それよりずっと小さいね」

「わかった！新種だ！」 「かみさまとんぼだ。だって野毛山幼稚園に来たとんぼだから」

「そうだね、いいね」と盛り上がっていた子どもたち。

それから図鑑に載っていないカメムシを見て、「これも新種だから、かみさまカメムシだ」と大盛り上り。この話をしていた子どもたちは生き生きと喜びに満ちていました。

新種を見つけた時(笑)、(新しい発見をした時)の喜びはなんと嬉しく、わくわくしたことでしょう。

ちょうど1年前。植物学者の牧野富太郎の生涯をドラマ化した朝ドラ「らんまん」で牧野富太郎役を演じた神木隆之介さんのキラキラとしたあの目の輝きを想い起こします。

おとなは、とかく「これは〇〇という花だ」「これは〇〇という虫だ」と名前を教えたがります。

教えこむのではなく、子どもは自ら知りたいという想いになった時に、自らが調べて知ろうとするのではないのでしょうか。

「不思議」という詩の時にもふれましたが、レイチェル・カーソンの著書「センス・オブ・ワンダー」の中の『知ることは「感じる」ことの半分も重要ではないと硬く信じています』という一節を想います。

私たちおとなも、生き生きと新鮮で感動に満ちた世界を共に味わい、アニメーション(わくわくドキドキ)のシャワーをたくさんあびたいものです。

